

最近の母親の子育て意識

宮川 公子

I はじめに

乳幼児虐待のニュースが連日のように報ぜられる昨今である。元来、「子どもは親にとっては、無条件にかわいい存在であるはず」とだれもが信じて疑わなかったが、乳幼児虐待の加害者の60%が実母であるという実態を考えると、その信念さえ、ゆるぎないものではなかったのかと、あらためて考えさせられる。

乳幼児虐待のみならず、育児不安、育児ノーロゼ、育児ストレスなど、最近の母親にとって、育児というのが、達成でき難い大きな負担になっている様子が伺える。

かつて、女性には本能的に母性が備わっており、「育児」は女性であればだれでもが簡単にできるものだと思われていた。しかし、それも、神話であったと思わざるを得ない。元上野動物園の園長でいらっしやった中川志郎先生は、「猿は何故子どもを抱くか」という講演のなかで、「子育ての能力は学習しながら獲得するものである」という意味のことを述べておられた。今日のような時代にあっては、多くの女性にとって「育児」は非常にむずかしい一大学習課題となっているように思える。

このような状況は、当然のことながら、育児を取り巻く社会環境の変化がもたらしていることはいうまでもない。その要因として考えられることは、1) 少子化、2) 核家族化、3) 育児経験や体験の不足、4) 育児情報の多様化、5) 親となるべき若者の精神的未成熟、などがあげられる。少子化に関していえば、今年も合計特殊出生率は1.33どまりで、いっこうに改善のきざしを見ない。育児に関しては重要なソーシャルサポートメンバー¹⁾であるお姑さんや実母のいない核家族が大部分の社会状況では、孤立した母親が育児不安に陥るのは当然ともいえる。少子化時代にあっては、一人の女性が、自分が出産するまで、ただの一度も実際の育児を見たり手伝ったりする機会に遭遇せずに自分の出産を迎える例が多い。突然、生まれてきた子供をどのように扱っていいか分からないのもうなずける。一方で、今日のように、育児に関する情報は豊富で、育児書などはいくらでも手に入る時代にあっても、実際の子育てが教科書に書いてあるとおりにいかないと言って、すぐパニックに陥る母親は多い。また、高度経済発展とともに、人々の生活全般が豊かになり機械化/文明化するなかで、「生きる」ことが物心両面から楽になってきている。そのような時代に育った若者は、苦勞したり我慢したりするような必要性に迫られることもなく、試練を受ける機会が少ないまま成人年齢に達しているように思える。かつて、色々な面で豊かではなかった時代に育った若者に比べて精神的成熟度が低いことは十分推察される。「親育ち」²⁾というような言葉がでてくるようになるのも必然である。

以上のような状況から、子育て支援の必要性は既に各方面から叫ばれていることはいうまでもない。行政でも、エンゼルプラン³⁾、新エンゼルプラン⁴⁾、少子化対策プラスワン⁵⁾等の政策を次々と打ちだしてはいるが、なかなか効果は見えてこない。

以上のような事から、我々は、保育園や幼稚園の現場で幼児や母親と関わる専門職として、最近の母親たち

が実際の育児場面でどのような不安や悩みを抱えながら育児を行っているのかという実態を把握し、育児支援の一助にしたいと思い、幼稚園 保育園児をもつ母親に対し、アンケートによる意識調査を行った。

Ⅱ 方法

新潟市内の保育園・幼稚園の5歳児クラスに在籍する子どもをもつ保護者を対象にアンケート調査をおこなった。幼稚園11園319家庭、保育園13園315家庭、合計24園634家庭を対象に、園を通じて調査票の配布/回収を行った。回収数は550通で回収率は86.8%であった。調査は2002年10月11日～10月24日の間に行った。回答者のうち、パートも含めて何らかの仕事を有する母親は314名(57%)、専業主婦は228名(41%)であった。(無回答が8名あった。)

Ⅲ 結果と考察

1 全体のまとめ

(1) 子どもの存在そのものについて

中乳幼児虐待が日常のように新聞記事に載るような今日の世相にあって、親たちは本当に子どもの存在そのものを喜んでいるのだろうかという疑問さえ生じる。そこで、「子どもが生まれて良かったと思いますか」という質問をした。これに対する回答は表1のとおりである。92.9%が「そう思う」、5.8%が「時々思う」と回答し、「思わない」、「生まなければ良かったは」それぞれ0.2%のみであった。

表1 子どもが生まれてよかったと思いますか？

質問項目	回答数	頻度
そう思う	511	92.9%
時々思う	32	5.8%
思わない	1	0.2%
子育てが大変なので生まなければよかった	1	0.2%
無回答	5	0.9%
合計	550	100%

(2) 子どもは可愛いと思うか

次に、「子どもは可愛いと心から思えますか」という質問をした。その回答は表2のとおりである。「そう思う」が87.5%、「時々思う」が11.8%と肯定が多く、「思えない」は0%であった。

表2 子どもは可愛いと心から思えますか？

質問項目	回答数	頻度
そう思う	481	87.5%
時々思う	65	11.8%
思えない	0	0.0%
無回答	4	0.7%
合計	550	100%

上の2つの結果から、子どもの存在や子どもへの愛情は大部分の親が肯定的に思っており、あたりまえのことではあるが、子どもについての基本的な気持ちには昔も今も変わらないこと確認できた。

(3) 逆に「子どもが可愛くないとか憎たらしいと思う時がありますか?」という質問を行った。回答は表3のとおりである。「ある」が15.5%、「時々ある」が50.7%で、「ない」は32.5%である。「ある」と「時々ある」合わせて66.2%がこのような思いを持つことがあるということがわかった。

表3 子どもが可愛くないとか憎たらしいと思う時がありますか?

質問項目	回答数	頻度
ある	85	15.5%
時々ある	279	50.7%
ない	179	32.5%
無回答	7	1.3%
合計	550	100%

(4) そのような時にはどうするか?

上の(3)で、「ある」、「時々」あると回答した364人に、「そのような時はどうするか?」と尋ねたところ、表4のような回答を得た。「気分転換して気を紛らわす」が64.0%と多く「子供の顔をみないようにする」が8.5%、「あんななんか嫌いと言う」が8.0%であった。

表4 そのような時にはどうしますか?

質問項目	回答数	頻度
気分転換して気を紛らわす	233	64.0%
あんななんか嫌いという	29	8.0%
子供の顔をみないようにする	31	8.5%
その他	57	15.7%
無回答	14	3.8%
合計	364	100%

(5) 子供に手をあげたくなる時がありますか?

体罰はよくないと頭ではわかっているが、実際の子育て場面では、思いどおりにならないと、つい手をあげたくなることもあることは十分考えられることである。そこで、「子どもに手を挙げたくなる時がありますか」という質問をしたところ、表5のような回答が得られた。「ある」が28%、「時々ある」が58.7%と高率であった。「ない」と答えた親は僅か12.5%であった。

表5 子どもに手をあげたくなる時がありますか?

質問項目	回答数	頻度
ある	154	28.0%
時々ある	323	58.7%
ない	69	12.5%
無回答	4	0.7%
合計	550	100%

(6) 「子どもに手をあげたくなる時」はどんな場合ですか

(5) で「ある」、「時々ある」と答えた477人に、「子どもに手を挙げたくなるのはどんな場合ですか」と尋ねたところ、表6のような回答を得た。「言うことを聞かない時」が圧倒的に多く、76.7%で次が「憎まれ口を言う時」27.0%であった。乳幼児虐待が起きる条件として、a) 親の素質 b) 親の意に添わない子ども c) 生活の累積するストレス d) 社会的孤立という4条件が揃っていることとされている⁶⁾。「言うことを聞かない時」という状態が持続すると「意に添わない子ども」につながっていく可能性があり、危うい状況になることが予想される。

表6 子どもに手を挙げたくなるのはどんな時?

質問項目	回答数	頻度
言うことをきかない時	366	76.7%
憎まれ口を言う時	129	27.0%
いたずらをした時	75	15.7%
その他	68	14.3%
回答数(複数回答)	638	133.8%
回答者	477	100%

(7) 子どもを虐待しているのではないかと

前の質問に関連して、「子どもを虐待しているのではないかと思う時がありますか」という質問をしたところ、表7のような回答が得られた。「ある」が6.9%、「ときどきある」が39.1%合わせて46.0%で、「ない」が52.9%であった。

表7 子どもを虐待しているのではないかと思う時がありますか

質問項目	回答数	頻度
ある	38	6.9%
ときどきある	215	39.1%
ない	291	52.9%
無回答	6	1.1%
合計	550	100%

(8) 子どもを虐待しているのではないかと思うのはどんな時

(7) で「ある」「ときどきある」と解答した253名につき、「それはどんな時ですか」と質問した結果が表8である。「たたく等体を傷つける」が26.9%と予想以上に多かった。また、83%の親が「言葉で心を傷つける」ことをしていることが注目される。

表8 子どもを虐待しているのはどんな時ですか

質問項目	回答数	頻度(253対)
たたく等体を傷つける	68	26.9%
しつけのし過ぎ	34	13.4%
言葉で心を傷つける(感情的な言葉など)	210	83.0%
ご飯を食べさせない等子どもの世話をしない	2	0.8%
その他	8	3.2%
回答数(複数回答)	322	127%
回答者	253	100%

(9) 育児に関して悩みや心配ごとがあるか

「育児に関して悩みや心配事がありますか」という質問については、表9のような回答が得られた。「ある」が64.5%、「ない」が34.2%であった。無回答が1.3%（7名）あった。

表9 育児に関して悩みや心配事がありますか

質問項目	回答数	頻度
ある	355	64.5%
ない	188	34.2%
無回答	7	1.3%
合計	550	100%

(10) 育児に関する悩みや心配事の内容

問9で「ある」と答えた355名について、その内容を尋ねたところ、表10のような回答が得られた。「しつけに関すること」が53.2%、「性格に関すること」が53.0%と多く、次いで、「癖や習慣に関すること」が26.8%とあり、病気や健康に関すること、身体的なことはそれぞれ22.5%、6.5%であった。以上から、最近の育児上の悩みは、病気等のことよりは性格やしつけに関するものが多い。

表10 育児に関する悩みや心配事の内容（複数回答）

質問項目	回答数	頻度 (355人対)
性格等に関すること	188	53.0%
しつけに関すること	189	53.2%
癖や習慣に関すること	95	26.8%
病気や健康に関すること	80	22.5%
発達に関すること	47	13.2%
身体的なこと	23	6.5%
その他	31	8.7%
回答数（複数回答）	653	184.0%
回答者	355	100%

(11) 育児のことで相談する相手はだれですか

「育児のことで相談する相手はだれですか」と尋ねたところ、表11のような回答が得られた。「家族」と「友達」が多く、それぞれ86.2%、69.6%でありました。一方、「かかりつけ医」、「保育士」、「保健師」などの専門職は、8.9%、15.6%、1.5%と少ないことが注目される。「子育てセンター」も2.0%と低かった。専門職に携わる者としては、考えさせられる結果である。

表11 育児のことで相談する相手はだれですか

質問項目	回答数	頻度 (355人対)
家族	474	86.2%
友達	383	69.6%
保育士	86	15.6%
かかりつけ医	49	8.9%
保健師	8	1.5%
子育てセンター	11	2.0%
その他	19	3.5%
回答数	1030	187%
回答者	550	100%

(12) 子育ては辛いと感じますか

「子育ては辛いと感じますか」と尋ねたところ、「感じることが多い」が4.7%、「ときどき感じる」が52.0%で、「あまり感じない」は42.2%であった。56.7%が辛いと感じていることがわかる。

表12 子育ては辛いと感じますか

質問項目	回答数	頻度
感じるが多い	26	4.7%
時々感じる	286	52.0%
あまり感じない	232	42.2%
無回答	6	1.1%
合計	550	100%

(13) 子育てが辛い理由

(12)で「感じる」、「時々感じる」と解答した312名について、理由を尋ねたところ、表13のような回答が得られた。「子どもの世話で肉体的に疲れる」「自分の時間がなくなる」など、実質的なものが39.7%、46.8%と頻度が高く、「子供と向き合っていると精神的に疲れる」も28.5%と高率である。「経済的負担が大きい」が31.4%、「親同士の付き合いや人間関係」も29.2%と高く、あらゆる項目で母親が負担を感じている、と思われた。

表13 子育てが辛いと感じる理由

質問項目	回答数	頻度 (312人対)
自分の時間がなくなる	146	46.8%
子どもの世話で肉体的に疲れる	124	39.7%
経済的な負担が大きい	98	31.4%
親同士の付き合いや人間関係	91	29.2%
子どもと向き合っていると精神的に疲れる	89	28.5%
育児に関して夫や祖父母と意見があわない	34	10.9%
その他	22	7.1%
回答数	604	193.6%
回答者	312	100%

(14) 有職者について：仕事と育児の両立は大変か

仕事を持っている者314人について「仕事と育児を両立させるための悩み、ストレスは大きいですか」と尋ねた。回答は表14のように、「非常に大変である」が14.0%、「大変である」が47.1%、合計61.1%が大変と答えた。一方、そうでもないと答えた人は38.2%であった。仕事の種類にもよるので一概にはいえないが、やはり、仕事の負担は60%のものが感じている。

表14 仕事と育児を両立させるための悩みやストレスは大きいですか

質問項目	回答数	頻度 (314人対)
非常に大変である	44	14.0%
大変である	148	47.1%
そうでもない	120	38.2%
無回答	2	0.6%
合計	314	100%

(15) 仕事をしていることで気分転換になるか

逆に、「仕事をしていることで気分転換になって良いこともあるか」と言う質問をしたところ表15のような回答が得られた。「はい」と答えた者が81.5%おり、逆説的ではあるが、興味深い結果である。「いいえ」はわずか2.5%であった。

表15 仕事をしていることで気分転換になって良いこともあるか

質問項目	回答数	頻度
はい	256	81.5%
いいえ	8	2.5%
どちらともいえない	43	13.7%
無回答	7	2.2%
合計	314	100%

(16) 専業主婦は育児に存分時間がかけられゆとりをもって子どもを育てられるか

今度は、専業主婦228人に対して質問した。「育児に存分時間がかけられ、ゆとりをもって子どもと向き合えますか」に対して、「はい」は29.4%、「いいえ」は14.9%、どちらとも言えないが55.3%であった。時間的なゆとりが、必ずしも「育児」の余裕にはなっていないことが示唆される。

表16 育児に存分時間がかけられ、ゆとりを持って子どもと向きあえますか

質問項目	回答数	頻度
はい	67	29.4%
いいえ	34	14.9%
どちらともいえない	126	55.3%
無回答	1	0.4%
合計	228	100%

(17) 1日中子どもといるのは疲れるか

関連のある質問として「1日中子どもといるのはむしろつかれますか」と尋ねたところ、表17のような回答が得られた。「はい」が33.3%、「いいえ」が26.3%、「どちらともいえない」が39.9%と分かれた。

表17 1日中子どもといるのはむしろ疲れませんか

質問項目	回答数	頻度
はい	76	33.3%
いいえ	60	26.3%
どちらともいえない	91	39.9%
無回答	1	0.4%
合計	228	100%

(18) 外で仕事をしていた方が楽なのではないかと思うことがあるか

同様の質問として、「外で仕事をしていた方が楽なのではないかと思うことがありますか」と尋ねた。結果は表18のようである。これも、「はい」、「いいえ」、「どちらともいえない」が、それぞれ、37.7%、31.6%、30.3%と分した。

表18 外で仕事をしていたほうが楽なのではないかと思うことがあるか

質問項目	回答数	頻度
はい	86	37.7%
いいえ	72	31.6%
どちらともいえない	69	30.3%
無回答	1	0.4%
合計	228	100%

(19) 夫は育児に協力するか

「夫は育児に協力するか」という質問については、「よくする」38.4%、「少しだけする」30.9%であり、「あまりしない」は18.0%、「全くしない」は5.5%であった。

表19 夫は育児に協力するか

質問項目	回答数	頻度
よくする	211	38.4%
少しだけする	170	30.9%
あまりしない	99	18.0%
全くしない	30	5.5%
無回答	40	7.3%
合計	550	100%

(20) 夫に対し何を一番期待するか

「夫に対し何を一番期待しますか」と言う質問についての回答は表20のようであった。無回答の49は気になるところではある。

表20 夫に対し何を一番期待しますか。

質問項目	回答数	頻度
妻へのいたわりや思いやり	128	23.3%
もっと早く帰ってきて欲しい	117	21.3%
子どもにもっと関心をもつて欲しい	92	16.7%
具体的な育児の協力(おしめ替等)	41	7.5%
育児の相談にのって欲しい	33	6.0%
その他	90	16.4%
無回答	49	8.9%
合計	550	100%

(21) 育児をやっていく上であなたが一番求めているものは何

最後に、「育児をやっていく上であなたが一番求めているものは何ですか」と言う質問をしたところ、表21のような結果が得られた。家族の援助が70.4%と圧倒的に高いことが注目される。核家族が多い現状を考えるとこれは「夫の協力」という意味合いが強いと考える。次いで、「何でも相談できる人」が11.1%、「保育園や幼稚園の援助」が6.5%、「子育てサークルなどの支援体制」が2.5%と続く。

表21 育児をやっていく上で一番必要なものは何か

質問項目	回答数	頻度
家族の領力	387	70.4%
何でも相談できる人	61	11.1%
保育園や幼稚園の援助	36	6.5%
子育てサークル等の支援体制	14	2.5%
その他	36	6.5%
無回答	16	2.9%
合計	550	100%

2 就労者と専業主婦の比較

就労者314人と専業主婦228人を分けて、この間に意識の違いがあるかどうか検討した。差があったもののみについて述べることにする。

(1) 子どもに手を挙げたくなることがありますか

問30で「子どもに手をあげたくなることがありますか」という質問については表22のようであった。「ある」の頻度は差がないが、「時々ある」の頻度が就労者55.7%に対し、専業主婦64.0%である。

表22 子どもに手をあげたくなることがありますか

質問項目	就労者	就労者構成比	専業主婦	専業主婦構成比
ある	91	29.0%	62	27.2%
時々ある	175	55.7%	146	64.0%
ない	46	14.6%	20	8.8%
無回答	2	0.6%	0	0%
合計	314	100%	228	100%

(2) 子供を虐待しているのではないかと思うことがあるか

「子供を虐待しているのではないかと思うことがあるか」との質問についての回答は表23のようであった。

「ある」の頻度には差がないが「時々ある」については就労者35.4%に対し、専業主婦47.4%と主婦群で高い。(1)の結果と合わせると、育児ストレスはむしろ専業主婦群のほうが多く感じており、それらのはけ口が子どもに向けられていることが推察された。

表23 子どもを虐待しているのではないかと思うことがあるか

質問項目	就労者	就労者構成比	専業主婦	専業主婦構成比
ある	23	7.3%	15	6.6%
時々ある	111	35.4%	104	45.6%
ない	178	56.7%	108	47.4%
無回答	2	0.6%	1	0.4%
合計	314	100%	228	100%

(3) 夫に対し何を一番期待するか

「夫に対し何を一番期待するか」の回答は表24の通りである。「もっと早く帰ってきて欲しい」、「妻へのいたわりや思いやり」が専業主婦群でより高いことが注目される。「具体的な育児協力」は就労者群でより高かった。

表24 夫に対し何を一番期待するか

質問項目	就労者	就労者構成比	専業主婦	専業主婦構成比
もっと早く帰ってきて	59	18.8%	58	25.4%
子供にもっと関心を	54	17.2%	38	16.7%
妻へのいたわり	68	21.7%	57	25.0%
具体的な育児協力	28	8.9%	13	5.7%
育児の相談にのって	17	5.4%	16	7.0%
その他	51	16.2%	38	16.7%
無回答	37	11.8%	8	3.5%
合計	314	100%	228	100%

(4) 育児をやる上で一番必要なものは何ですか

「育児をやっていく上で一番求めているものはなんですか」という質問の回答は表25のとおりである。「家庭の協力」は当然の事ながら就労者群に高く、専業主婦群では、「何でも相談できる人」の項目が頻度が高かった。

表25 育児をやっていく上であなたが一番求めているものは何ですか

質問項目	就労者	就労者構成比	専業主婦	専業主婦構成比
家庭の協力	235	74.8%	150	65.8%
何でも相談できる人	28	8.9%	31	13.6%
子育てサークル等の支援	7	2.2%	7	3.1%
保育園や幼稚園等の援助	21	6.7%	15	6.6%
その他	20	6.4%	22	9.6%
無回答	3	1.0%	3	1.3%
合計	314	100%	228	100%

IV 全体のまとめ

これまで、調査結果を設問ごとにみてきたが、ここでは全体を通しての考察をしてみたい。

問1と問2は、子供の存在そのものや子供に対する基本的な気持ちを尋ねたものである。9割の者が、子供が産まれてよかった、子どもは可愛いと心から思えると答えている。

問3から問8までは、実際の子育て場面での子どもに対する気持ちを尋ねたものである。子どもが可愛くないとか憎たらしいと思うことが「ある」「時々ある」は66.2%、「子どもに手をあげたくなることがある」「時々ある」は86.7%、「子どもを虐待しているのではないかと思うことがある」「時々ある」は46.0%であった。子供に手をあげたくなる理由としては、「言うことを聞かない時」が76.7%、次いで「憎まれ口を聞く時」が27.0%であった。虐待しているのではないかと思うことがある場合としては、「言葉で心を傷つける」が

83.0%、と一番多いが、「たたく等体を傷つける」も26.9%認められた。これらの結果は、基本的なところで子どもは可愛いと思いながらも、実際の子育て場面では、多くの母親達が育児に困難や負担を感じ、そのストレスを子どもに向けている傾向があることを示している。

問9から問13までは育児に関する悩みや心配事についての質問である。育児に関して悩みや心配事がある者の割合は64.5%で、予想どおり非常に高い頻度で認められた。その内容については、「しつけ」(53.2%)や「性格」(53.0%)に関するものが多く、「病気」(22.5%)や「身体」(6.5%)に関することは比較的少なかった。医療機関や夜間救急などの整備が整い、病気等についての心配は少なくなったのかもしれない。育児の相談相手としては「家族」(86.2%)と「友達」(69.6%)が多く、「小児科医」や「保育士」などの専門職はあまり頼りにされていないことがわかった。家族は核家族が多いことから、夫への期待が大きいことが推察される。専門職が期待されない理由は、敷居が高いからかそれとも子供を連れて出かけるのは大変なので身近な者を頼りにするのかもしれないと考えるが推察の域をでない。子育てを辛いと感じるかについては「感じるが多い」(4.7%)と「時々感じる」(52.0%)を合わせて、56.7%であった。理由については自分の時間がなくなる、(46.8%)や肉体的に疲れる(39.7)と実際的なものが多かった。

問14から問18までは、有職者314人と専業主婦228人に分けて、仕事との関係について尋ねた。「仕事との両立は大変である」と有職者の61.1%が答えている一方で、有職者の81.5%が「仕事をしていることでむしろ気分転換になって良いこともある」と答えている。専業主婦に対して、「ゆとりを持って子どもと向き合えますか」という質問をしたところ、「はい」と答えたのは29.4%と予想より少なかった。さらに、「1日中子どもといるのはむしろ疲れる」(33.3%)、「外で仕事をしていたほうが楽なのではないかと思うことがある」(37.7%)と思う者もあり、専業主婦には、時間があっても別の意味で育児に負担を感じていることが推察された。

問19から問21は育児に対する援助のあり方を尋ねた。「夫は育児に協力するか」については、「良くする」38.4%、「少しする」30.9%と合わせて69.3%が「する」と答えた。最近の父親は、ひと昔前に比べて、手伝いをする率が高くなったように思われる。「夫に対し一番期待すること」は、「妻へのいたわりや思いやり」が23.3%と1位で、次が「もっと早く帰ってきて欲しい」(21.3%)であった。具体的な育児への協力を挙げたものは7.5%と少なかった。妻は夫に対し、むしろ精神的な支えを期待していると思われた。「育児をやっていく上であなたが一番求めているものは何ですか」という質問の答えでも、「家族の協力」が70.4%と1位であった。大部分が核家族の今の家庭では、夫への期待が強いものと推察される。著者が短期大学在籍中の学生を対象に行った調査でも、「仕事と育児を両立させる上で一番必要とされることは何ですか」という質問の回答の第1位は「夫の協力」⁷⁾であった。

就労者と専業主婦の群別の比較から、興味深い結果が得られた。ひとつは、専業主婦のほうがむしろ育児のストレスを多く感じており、そのはけ口が子供に向けられている傾向が認められた。結果として、その分だけ家族(夫)への期待が強くなっているのではないかと思われる結果が得られた。そして、その期待の内容は、育児行動のような直接的な援助よりは、妻への思いやりや相談相手といった精神的な事が大きいと思われた。

文 献

- 1) 丸山 恵 乳幼児期の子どもを持つ母親へのソーシャルサポート、小児保健研究 60巻6号 2001
- 2) 山懸文治 現代保育論 ミネルバ書房 2002

- 3) エンゼルプラン 厚生省 1994
- 4) 新エンゼルプラン 厚生f労働省 1999
- 5) 少子化対策プラスワン 厚生労働省 2002
- 6) 小林美智子 小児の虐待は予防できるか 小児保健研究 61巻 3号 2002
- 7) 宮川公子 少子化時代の子育て支援、県立新潟女子短期大学紀要 40巻 2003